

## 土器がつくる地域社会：タイ東北部ダーン・クウィアの事例から

中村真里絵

可塑性に富む粘土は、外から力を加えることで様々な形へと生まれ変わる。土器もまたこの可塑性によって、生みだされるものである。古代から現在まで連綿と続いてきたシンプルな営みは、自然資源、工房や窯などの設備、作り手の技能、使い手のニーズや嗜好などが密接に結びつくことで成り立っている。それぞれの要素は、時代や社会的状況に応じて変化するため、それに伴い土器や土器づくりのあり方も変わる。このことが土器を単なる人工物ではなく、社会的生産物たらしめる所以である。本発表は、こうした土器の物質的特性を踏まえ、社会との結節点としての土器を分析し、土器づくりを通じた地域社会の再編を明らかにすることを目的とする。モノと社会との関わりについての分析は、近年の物質文化研究の動向の潮流である、モノから人、そして社会との関係性を明らかにする試みでもある。

本発表の舞台となるのは、現在、日用品から装飾品までデザインや形態の多様な土器を盛んにつくっている、タイ東北部コラート近郊農村に位置する土器生産地ダーン・クウィアである。この数十年のあいだに多くの土器づくりが、代替品である工業製品の流入や作り手の後継者不足によって急速に衰退しつつあるなか、ダーン・クウィアは、1970年代後半以降、室内外の装飾品や近隣の観光地向けの土産物を生産することで、むしろ土器づくりが活発化してきた事例である。

本発表では、まず、土器づくりの変換期を 1970 年代後半から 1980 年代と捉え、ダーン・クウィアの土器づくりが農業の副業から専門化したことに着目し、専門化の契機を、土器製品の多様化と窯の技術の変容という二点から考察する。

ダーン・クウィアの土器づくりの専門化には、村に移り住んだ学生や教師などの知識人がかかわっており、新たな販路の開拓、土器製品の多様化、そして窯の技術の導入において、大きな役割を果たしていた。こうした知識人の動向には、当時の学生運動の影響や知識人の村落生活への志向が結びついていることを示す。

続いて、土器づくりが農業の副業から専門となったことにより、副業時代の居住形態や人々の社会関係のあり方がどのように変化し現在の土器づくりを営んでいるのか、タイ農村研究の蓄積を踏まえて分析する。

土器づくりの担い手たちは、土地開発に伴い農耕地での従来の土器づくりが困難になったことから、場所を集落内へ移動して土器づくりをおこなった。その結果、村人たちは、土器づくりを集落という居住の場に取り込むことにより、「職」と「住」が一体となった土器づくりの空間をつくりだすことになった。集落内の屋敷地には家屋の他、工房、窯を配置されている。屋敷地内の構成に注目すると、次のような居住の形態が見出される。子どもが婚姻時に父母から屋敷地の土地をゆずりうけ、広さや経済力に余裕があれば、家屋だ

けでなく工房、そして窯をつくり独立していくというパターンである。さらに、土器づくりの社会関係に着目すると、夫婦、親子、兄弟、そして親族という婚姻や血縁関係が中心となっていることがわかる。そこには明確な雇用関係がみられるものの、工房の持ち主が仕事の機会を近い人に仕事を提供するという側面がある。このことから土器づくりの専門化には、新たな販路や技術に対応することと同時に、村人たちが農業を生業としていた時代から慣れ親しんできた居住のあり方や人々の社会関係のあり方の持続が欠かせないものだったといえる。工房の土器づくりは、かつて東北タイの生業を維持する機能を持っていた居住の形態である屋敷地共住の延長線上に営まれている。

以上の事例の報告から明らかになるのは、次のような諸点である。

現在の土器づくりは、著しい社会変化のなか、村人がこれまで培ってきた居住形態や村人の社会関係のあり方、そして土器づくりの技術を、再編させることで成り立っている。その再編された地域社会は、近年の農村地域が抱える過疎化や高齢化という問題とは無縁であり、むしろ従来のタイ農村地域にみられた社会関係や社会構造のあり方を再生しているようでもある。それは、土器が作り手である村人をより強固に結びつけていること、屋敷地という土地が土器をつくる重要な資源となっていることを示している。このことは、土器が地域社会を再編する原動力となりうることをも示している。本発表では、土器というモノと人、社会との関係に注目することにより、社会や人が土器を変化させている一方で、モノが人や社会のあり方を変化させていることを明らかにした。

最後に、村人たちにとって土器はどのようなものであるか、述べたい。土器づくりの専門化は、周辺地域の村人たちによる自給自足的な農業から換金作物栽培への転換や、若者による都市への出稼ぎ労働の増加などが起こった1960年代以降の社会変化に伴って生じている。こうしたタイ全体の様相を踏まえると、ダーン・クウィアの土器づくりの専門化は、貨幣経済化がすすみライフスタイルが大きく変わるなかでの村人の適応の表れのひとつであり、土器とは村人にとって換金作物の代替であったともいえる。